

診療早期再開 地域を守る

「この病院が開いているとやはり安心しますね」

西日本豪雨で1階が水没したまび記念病院（岡山県倉敷市真備町）。水が引いた後の7月21日、「喉が痛い」と診察を受けに訪れた地元

の男性（58）はこう語った。病院はレントゲンや血液検査の設備を持つ医療車両を臨時診察室として使い、住民の診療を続けていた。

病床数80床で、15の診療部門を持つ病院は、真備町の中心的な医療機関だ。7日、近くの小田川などの氾濫により大きな被害を受けたが、2日後には、病院の患者が近隣の系列診療所で診察を受けられるようにした。18日には、四国地方から借りた医療車両が病院に到着した。

病院理事長で内科医の村上和春さんは「待っている患者さんがいた。地域医療を守る大きな責務があっ

た」と説明する。真備町の医療機関は、12施設のうちの11施設が被災した。

医療車両の手配を仲介した国際医療NGO「AMDA」（本部・岡山市）の理事・難波妙さんは「かかりつけの医師に飲み慣れた薬を出してもらおう。そんなことが患者を安心させる」と話す。

早期の診療再開に向けて、村上さんたち病院関係者を支えたのは、地域住民

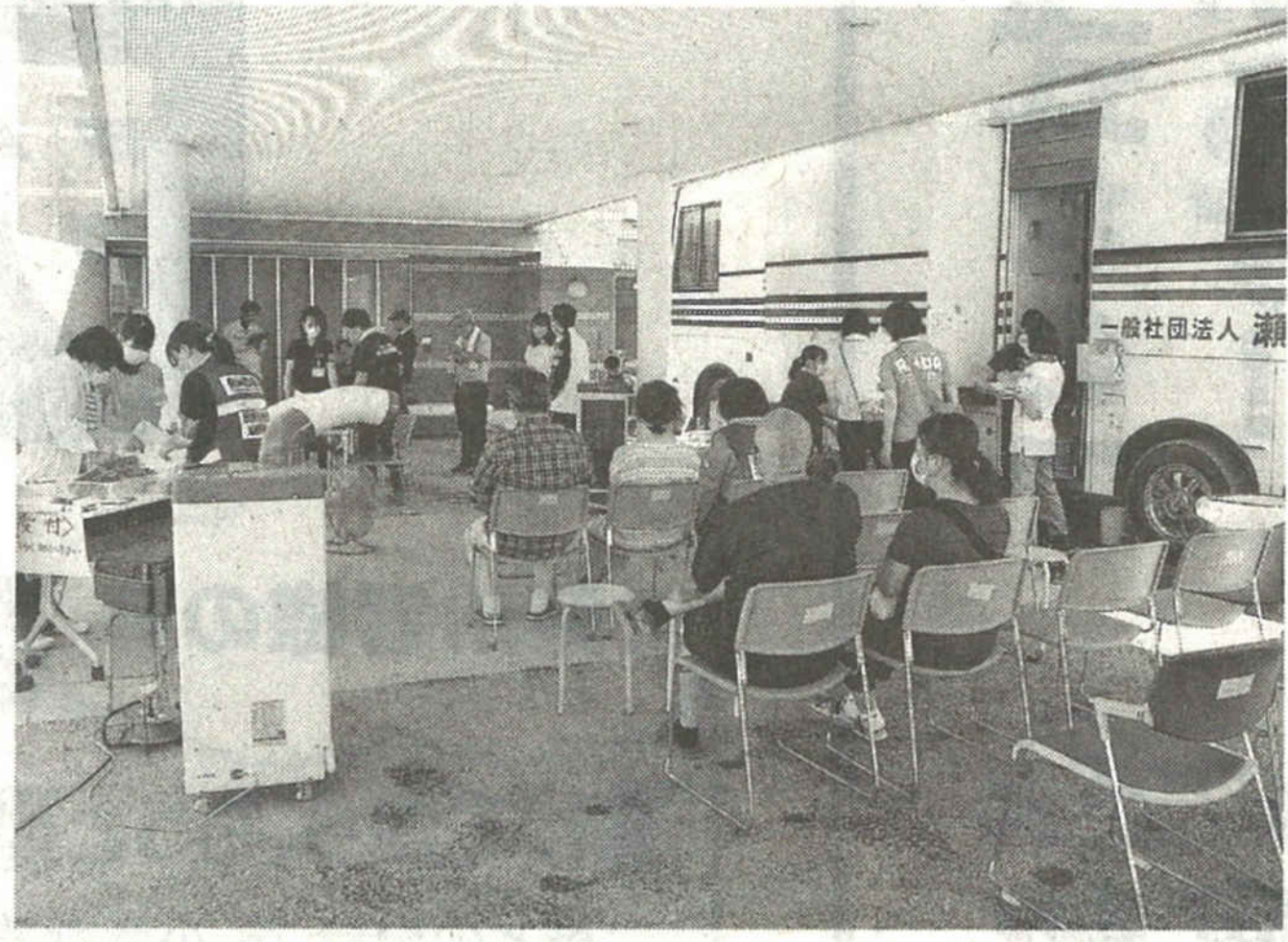
からの厚い信頼だ。

病院の1階が水没した際、周辺の建物に取り残された住民200人以上がボートで救助され、集まった。

入院患者や職員と合わせ、約330人が電気の途絶えた院内で一夜を過ごした。「避難した人が『病院が見えてほっとした』と話すのを聞き、一日でも早く病院を復活させると誓った」。

村上さんは振り返る。水が引くと、1階にはイスや机、書類が泥まみれで散乱していた。泥は猛暑ですぐ乾き、大量の砂ぼこりが舞った。職員が交代で掃除した。村上さんも系列診療所で患者を診ながら

まび記念病院で臨時診察室となった医療車両。正面玄関前に止められ、患者が診察を待っていた（7月21日、岡山県倉敷市真備町で）



ら、片付けに通った。

今は医療車両に代わり、敷地内にプレハブの仮設診療所を開設している。患者は冷房が利く場所で診察を待てるようになった。病院の建物も一部、電気が復旧し、調剤もできる。電子カルテのデータが無事だったのは幸いだった。岡山大や地元の医師会も支援する。

9月中旬には、病院2階の設備やエレベーターを整備し、腎臓病患者の人工透析治療を再開する予定だ。被災前は1階で行っていた外来の診療も2階に移す。年内には、3、4階の病棟で入院患者の受け入れも再び行う方針だ。

被災して真備町を離れる住民も相次ぐ中、地域で頼りにされる病院の本格復旧は、被災地再建の行方も左右する。村上さんは「つらい経験だったが、地域の人たちとの結びつきは強くなった気がする。医療サービスをさらに充実させ、信頼に応えられる病院にした」と意気込む。